

形になっていく学びの楽しさと困難さ

看護科3年 林 エリ

はじめに

私は、今回のケーススタディを通して、自分の看護観を明らかにしていく事ができた。そこで明らかにできたのは「患者様の気持ちを患者様の立場になり、傾聴していく。」というものだった。その考えにたどり着けたのはなぜか分析していく。

本論

私はこのケーススタディにむけての事例研究として成人看護学実習での肝臓癌stageⅣの患者様との出会いに焦点をあて取り組むことにした。本来目的としては「患者様のニーズを満たしていくと回復意欲の向上につながるのではないか。」というものであったが、成人看護学実習での末期がん患者様との出会いで「死にゆく人は、どうなのだろう。回復しない患者様の気持ちやメンタルはどうなのだろう。」と。私は考えをシフトして『肝臓癌の終末期にある患者のトータルペインを理解するプロセス』とした。改めて自分の看護記録や関連図などを見返すことで、私の看護と向かい合い分析し、患者様の言動や病変などを抽出することで私はいつも患者様のニーズを探していることを知った。自分の看護で大切にしていることは自分の傾向であり今後の看護に活かされることであるということを知った。また、作成過程では担当教員やチームメンバーに意見を聞くこと、わからない事をあきらめない事で、私の苦手とする人に「伝える力」をまた少し養うことができた。今後の自分の看護向上の上でなくてはならないものが自分の看護観を保持向上するものだけでなく、将来の患者様のために有益になるように今後の現場での研究に活かしていく土台にしていきたいと考える。また、評価として他者のケーススタディをしっかり読み、自分のものとし、良い事、もう少しここがこうだと良いと伝えるのには私の持つ看護観の押し付けになるのでは？と引け目を感じながらも教員の助言で「それを伝えてあげることができる関係は素敵」だと教えていただき、自分の考えを伝えることができた。この体験は非常に貴重な体験であり、考えを伝えることの大切さを再確認することができた。また、少しずつ出来上がる資料を喜び私の大切な宝物であると考える。

おわりに

私はこのケーススタディの期間を通し、日頃の私の考え方とその考えにたどり着く経緯を大切にしていかなければならないことを学ぶことができた。この学びから、看護師は常に学び続け、それは患者様の過程に直結するものであると感じることができた。

今後の予定

- 1月7日(月)始業
- 1月22日(火)看護科1年生スキー研修(保健体育)
- 1月27日(日)介護福祉士国家試験
- 2月17日(日)看護師国家試験
- 2月26・27日(火・水)2年生合同学習「カンファレンス」
- 2月28日(木)予選会
- 3月6日(水)卒業式
- 3月11・12・13日(月・火・水)日赤救急法
- 3月14・15日(木・金)1年生合同学習
テーマ「排泄ケアためしてガッテン」
- 3月19日(火)終業式大掃除

編集後記:1年間お世話になりました。学生の皆さんは1日1日色々な人と出会い、いろいろな学びに心躍らされた1年でした。その一つ一つの出来事に感動の連続でした。今回のケーススタディでの感動をお伝え出来たら、と思います。介護福祉科と看護科の学びあいで、学生は多くの刺激を受けた体験となりました。日々進歩していきたいと思ひます。来年もよろしくお願ひいたします。

伝える事、表現することの難しさ

看護科3年 澁谷 悠

はじめに

今回のケーススタディでは『ケーススタディの取り組みにより介護・看護の質の向上につなげる』という目標、3つの目標に沿って行った。目標・目的に対してケーススタディの論文作成・論文発表会の中でどのように取り組み成果が得られたかという点に関して以下に述べる。

1. 自分が行った看護を論理的に振り返りまとめる
ケーススタディでは母性看護学実習での症例を用いて行った。対象の行動の変化に着目し、保健信念モデル、行動変容ステージで自分の行った指導、対象の行動変化の要因の関連性についてまとめ論文作成に取り組んだ。取り組みの中で実習中には自分の捉えられなかった対象の行動変容に関して理論を用いて分析していく事で行動変容や隠れていた保健信念について、指導との関連性について気づくことに繋がった。またそこから自分の看護、指導を振り返り保健信念モデル、行動変容ステージの有用性について学ぶ事が出来た。しかし、発表のなかでは自分の性格や傾向から自分の論文について十分に伝えることが出来なかった。緊張していたというよりも人前で真面目に話すという事が苦手であるという事から自分が伝えたいことが十分に相手に伝えることが出来なかったと振り返る。また自分の行動が想像以上に他者に対して影響を及ぼしてしまうという事に気づくことが出来た。

2. 他者の論文から批判的思考力を養う

今回の発表会ではケース委員の役割である司会とフロアの両方を体験した。司会の際には質問者の質問の意図を読み取れないことがあった。司会としての役割以前に、論文を読み取ることが十分でないことから質問者の意図を読み取ることが困難になったのではないかと考えられた。ここで伝える事、受け取ることの難しさについて感じた。批判的思考を持つ以前に十分に読み込まないことから発表会では質問が出来なかったと考える。また疑問や意見はあったが時間の都合や率先して挙手出来ない事があった。

3. 介護・看護の強みを見出す

3日間の発表を通して互いの強みや着眼点の違いについて捉えていく事が出来た。また関わりの中での気づきから理論立てて論文発表している方の様子を見て伝え方や発表の仕方について学ぶ事が出来た。

まとめ

ケーススタディを通して伝え方、受け取り方について考えていく事が出来た。発表内容を理解するためには相手の伝えたいことを理解しようという姿勢や態度が重要になると考える。また伝えるためには相手にわかりやすく論理立てて伝える努力が必要になると考える。



六日市医療技術専門学校

ニュースレター2018. 12月号vol. 1 No.8

記事 平成30年度合同ケーススタディ発表 P1
 ケーススタディの学び P2・3・4
 行事予定 P4
 編集後記 P4

平成30年度介護福祉科看護科合同 ケーススタディ発表会を開催しました

実習指導者をお招きし、平成30年11月13日～11月18日まで、介護福祉科2年生17名、看護科3年生21名がケーススタディ発表を行いました。下級生も学習のため一部参加しました。



ねがい

10年後には各分野で研究発表出来る人材になる。

目的

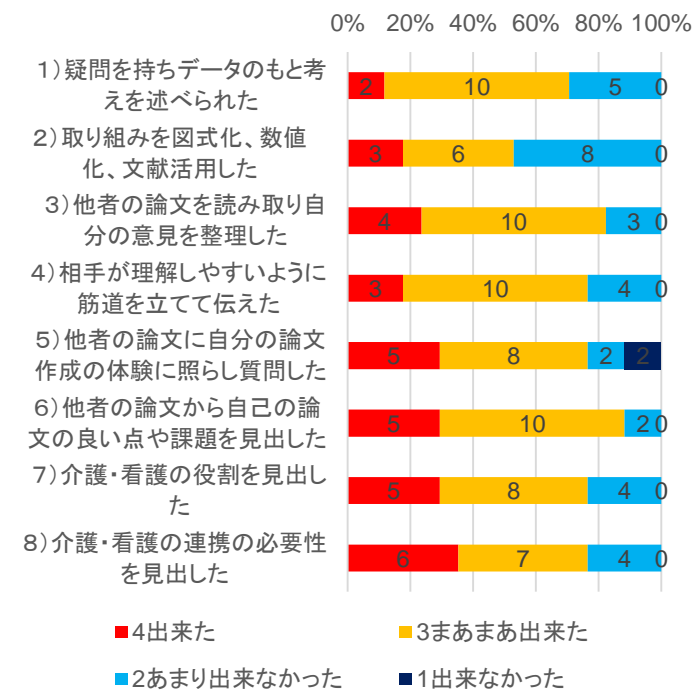
ケーススタディの取り組みにより、介護・看護の質の向上につなぐ。

目標

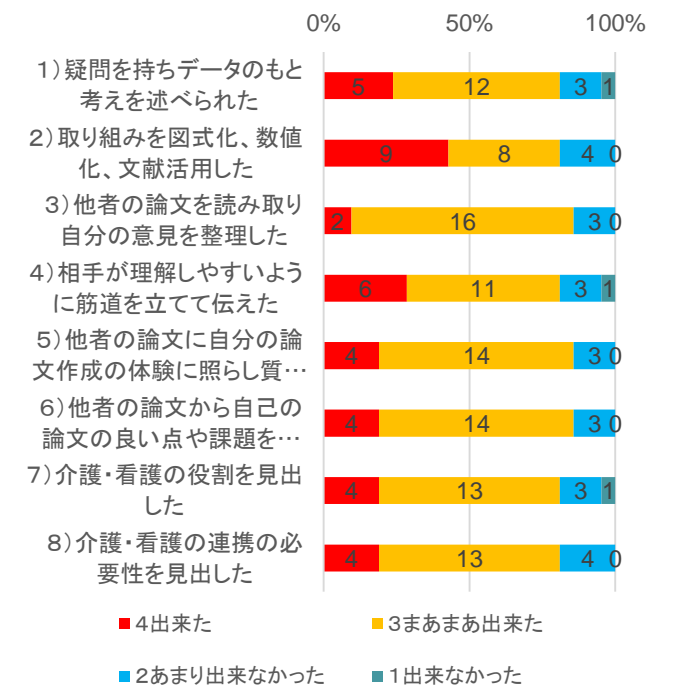
1. 自分の行った介護・看護を論理的に振り返りまとめる(疑問を持ちデータのもと考えを伝える。取り組みの図式化、数値化、文献活用)
2. 他者の論文から批判的思考力を養う(他者の論文を読み取り、自分の意見を論理的に整理し、相手が理解しやすいように反応を見ながら道筋を立てて伝える)
3. 介護・看護の強みを見出す。(チームでともに働く仲間として互いを理解する)

ケーススタディ終了後、目標がどのように達成されたのか、発表者の介護福祉科2年生17名、看護科3年生21名にアンケート調査を行。その結果、介護福祉科と看護科では学びに特徴がみられました。それは、介護福祉科の学生は、「他者の論文からの学びの項目が高く、看護科学生は、図式化、数値化、文献活用の項目や、論理的な思考の項目の値が高かったことから言えました。ケーススタディの学びを紹介します。

介護福祉科ケーススタディ発表振り返り



看護科ケーススタディ発表振り返り



思い込みの影響を少なくするために

看護科3年 高口 浩

はじめに

人は何かを考える時に自分が今知っている情報から出来事を考える事から、思い込みを完全に無くすことはできない。

しかし、思い込みで物事を見ていると大事な情報を見落とす事に繋がり、看護を行う上で対象を理解する事の妨げに繋がる事となる。

私は今回のケーススタディを行う事で、自身の傾向や考え方、陥りやすい問題について自覚出来た事が一番大きな収穫であったと考える。

そして、思い込みの影響を少なくする考え方、見方を少なからず学んだ事を記す。

先入観、思い込みとは何かを考えるとそこには不確実な出来事、物事を絶対視してしまう事にあると考える。

人は過去の出来事や得てきた情報から物事を推察していく事で対策を考える為、それ自体は悪い事ではないし、それを止める事は出来ない。

しかし、それを強く思い込む事で現実を正しく見れなくなり思い違いによる大きなミスや人間関係の悪化などに繋がっていく事となる。

そうならないためにどうすれば良いか、それは常に考えている事、推察した事にたいして「ほんとうにそうなのか」と対立した考えを持つ事、そして情報を複数持つ事等が重要になってくる。

自分が思い込みで動いてないか、本当にそうなのかと考える事で不確実な出来事を見るうえでそれを「絶対視」せず柔軟に考える事に繋がり、そして情報を複数持つ事で多角的な見方、一方的でない見方になっていくのである。私がまとめたケーススタディでは自身の思い込みにより対象者の理解への道が遠回りになり上手くいかなかった事が自分自身で分かるような内容になっていたと考える。

そうならないために今後の自分に必要になっていく考え方、見方として看護を行う上で常に自分の考えの片隅に、「それで正しいのか、思い込みで動いていないか」を考える事、そして必要な情報を複数もち多角的に物事を見ていくようにしていく事が重要であると考えます。

そうする事で私が行う看護の質の向上につながり、患者の為の看護へと繋がっていくはずである。

人生は単純な生への営みであり死も人生

看護科3年 古場 真道

はじめに

私は肺線維症で終末期にある高齢者の看護についてケーススタディを行った。その中で死生観について考える機会があり、様々な死に対する様々な考え方を文献などを活用し学び自己の死に対する考えに変化があった。この事が今回のケーススタディを通しての大きな成果だと考え、どう死に対する考えの変化があったのかを振り返る。また、発表を通して教員から意見をもらった。なぜ意見をもらう事が出来たのかも振り返る。

肺線維症の事例を通し、死は悲しいものだという認識があったが、必ずしも悲しいものではないと考え変化した。死に対する考え方は人それぞれであり人間は必ず、生を授かった以上、必ず老い、病気になり、最後には死んでいくというプロセスを歩んでいく。死が悲しいと思うという事は、若さや健康、生命に執着しているからではないだろうか。本来の人生は単純な生の営みである。つまり捉え方ひとつで、死が悲しいものか、そうではないものかに分かれる。

その為、終末期において看護師はQOD(Quality of Death)を大切に「この世に生を受けて本当に良かった」「与えられた人生を生き切った」と思えるようにしていく必要があると考えることができた。

チームで行うことや日々の振り返りの大切さ

看護科3年 橋本 千里

はじめに

今回ケーススタディを始める前に、自身の言いたいことを論文化して相手に伝えることや、同じ担当になったチームメンバーと協力しケーススタディを仕上げる事。また、チームメンバーや他クラスにも意見が言えることを目標にしケーススタディを取り掛かった。日々目標をたて、担当の教員・メンバーと連絡・報告・相談を行いながら実施していくと自身の目標や、ケーススタディの目標を達成することができたため以下に報告する。一回立ち止まり意見や自分の目的を振り返る

ケーススタディを進めていくにあたり、手探りの状態から論文づくりをはじめた。計画書を作成する際、自身が研究したいと思うもの目的が納得いかず、行き詰ることが多くあった。また、目的が決定しても論文の内容であったり、図や数値、文献が私のケースであるのかなど行き詰ることが多くあった。

私は性格上、深く考えこんでしまい周りの意見を取り入れられない状況に陥りやすいことがある。ケーススタディ作成中に度々出てしまっていた。しかし、教員が「一日のスケジュールを担当になったメンバーと決め、私に見せにきて。」と決めてくれたため、メンバーや担当教員と一緒に話しあう時間も増え、自身のモヤモヤとした気持ちさが少し取り除かれた。そして、日々メンバーの人と、話しあうことで、メンバーの伝えなかったことや、良かった点・悪かった点の評価を本番で発言できたのだと思う。

また、最初スケジュール決めできっかけとなり、メンバー同士で悩んでいる時は相談や報告、連絡もでき、一回立ち止まり、意見や自分の目的を振り返るといった冷静に順序だててケーススタディに取り組むことができた。

また、メンバーの頑張っている姿から、自身も頑張らないといけな

いという思いになり、メンバーからも多くの学びをもらった。このメンバーで取り組むというのは、これから勤務する病院にも役立つと思う。メンバーは仲間であり、チームで質のよい看護を提供していかなくてはならない。そのめにも、今回学んだ、報告・連絡・相談を行いチームで協力しあうこと、メンバーに刺激になれるような存在であること。また、自分の性格を少しでも理解し振り返る時間をつくることを今後おこなっていきたい。

ケーススタディを通し目標は達成したと考える。ケーススタディで学んだこと、これからも実施していきたいことを以下に記載する。

- ・個人ではなく、チームで行っていると自覚をもつこと。
- ・日々小さな目標でもいいから目標をたてる。
- ・報告・連絡・相談をする。
- ・相手の意見や目的、自身を振り返る時間をつくる。

論理的思考による看護の質の向上

看護科3年 岩本 郁

はじめに

ケーススタディに取り組むことで私は、自分の行った看護を文献活用し振り返ったり、数値化しまとめたりなどの基本的な論理的思考を身に付けることが出来たのではないかと考える。看護を今後実践していくなかで論理的思考で物事を判断し整理することは必要不可欠であり、そうしなければ持続的な看護の質の向上につなげることが出来ない。今回のケーススタディにより自身の看護の質の向上に繋がったのか振り返りたい。

これまで、自院での業務や実習での看護実践では事前に教本や手順書などを確認し対象者に行ってきた。ケーススタディを行う前まではそれでよいと思っていた。間違っただけではないと。しかし、それでは同じことをただ繰り返すだけになってしまい、看護ではなくただの作業になってしまう。ケーススタディを通してこれまでの自分を振り返ることで、そのことに気が付くことが出来た。看護を行うには探究心が必要であり、日々移ろいゆく患者さんに対応するために、こちらも看護の質を向上させるという変化が必要になる。そしてその変化には論理的思考で、看護を整理し、対象に合わせた変化でなければならぬ。看護においてはこの事は基本的なことではあるが、その基本的なことに気が付けたのは私にとって大きなことである。そしてそのことに満足するのはなく、そこから更に向上していけるように論理的思考を常に持ち続けたい。

今回のケーススタディにより自分自身の看護を見つめなおすことが出来たことに加え、他の学生の考えを自分の中に取り入れることも出来た。また、科が違う介護科と合同で行う事で介護ならではの視点や気づきを発表や質問、講評から得ることが出来た。自分の考えの過ちは自分自身で気づくことは難しい。しかし、他者からの指摘で気づくことが出来、こちらからもクリティカル・シンキングで感じたことを伝えると相手の気づきとなり、より質の高いものとなる。私も質問や講評から気づけていなかった事象に目を向けることができ、自分自身の考えの質を高められたのではないかと考える。

まとめ

ケーススタディに取り組むことで看護を論理的に分析する論理的思考を身に着けることが出来た。これは看護の質を向上させることにおいて重要なことである。そして、論理的思考で考えるだけでなくそれを人に伝え人から意見をいただくことでより質の高いものへとしていく必要があることを学ぶことが出来た。

どうしてこの考えに行きついたのか考えると、自分の行った看護を振り返り自分の特に不足していた家族への看護にケーススタディを通して気づき、どのように看護を提供すれば良かったのか、患者、家族の死に対する考えはどうだったのかと疑問を持ったからであると考えます。

ケーススタディを通し自己が行った看護を振り返り疑問を持つ事で新たな考え方や、こうすれば、より良い看護を提供できたのではないだろうかと考えた事により、看護の質の向上に繋げる事ができケーススタディの目的を達成することができた。発表では疾患の説明なども取り入れ、分かりやすかったなどの反応を得られ、また教員からQOD(Quality of Death)という考え方を学ぶ事ができた。

他者に自分の意見を整理し分かりやすく伝える事により、他者からの意見を得られることは自己の発表内容が他者に伝わったことの証明にもなるし、他者の意見を聞き自己の成長にもつながるものだと学び、相手に分かりやすく伝える事の必要性を学んだ。

まとめ

ケーススタディを行い自己が行った看護を振り返り疑問を持つ事で、看護の質の向上につながる事を学んだ。相手に分かりやすく伝える事で、他者の成長だけではなく自己の成長に繋がると学んだ。

最後に、今回のケーススタディ作成、発表で学んだことを活かし、看護師としてケーススタディの作成を行う際に今回の学びを活かしていき看護の質の向上に努めていきたいと考える。

ケーススタディの学びを紹介します

全体像の捉え方の学び直し

看護科3年 塩谷勇希

はじめに

ケーススタディでは精神看護学実習での統合失調症患者との関わりの記録をプロセスレコードに再構築し、自身と対象者の傾向と関わりの変化などを抽出し考察した。またそれと同時に今後の自身の課題を考えることができた。ここではケーススタディの目標である1.自分の行った介護・看護を倫理的に振り返りまとめる(疑問を持ちデータのもと考えが言える。取り組みの図式化、数値化、文献活用)について振り返り評価する。

ケーススタディでは精神看護学実習での統合失調症患者A氏との日々の関わりから変化した自身とA氏について明らかにするために実習記録や情報収集用紙などからプロセスレコードに再構築させることで、構成を自身の傾向、A氏の傾向、学生主体の援助、自身の傾向に気づいたきっかけなどを客観的に構成させ考察することができた。その過程の中で日々の記録を書くときに相手の反応や発言した言葉を正確に書き留めておく必要があったと気づくことができ、記録の重要性について再認識することができた。またこの時点で取り組みを図式化することで見る人にとってもわかりやすくなっていたのではないかと考える。しかし、結論から考察する段階で文献の活用をしていないことがあり個人の考えで収まっていたことから文献活用は不十分であった。そのことから文献を活用し自身の考察を先人の考えも活用し証明できるようにする必要があることがわかった。そして、全体的に見て1.自分の行った介護・看護を倫理的に振り返りまとめるについては、プロセスレコードに再構築し、場面構成から客観的に自身の看護を振り返ることができた点で目標達成はできたのではないかと考える。

今回ケーススタディを体験して、事例検討や看護研究する際は日々の記録を参照し再構築、考察することがあり、また嘘偽りなくするため、その時点での全体像がわかる記録の書き方が大切であることを学ぶことができた。そして自身の考察を証明するための文献検索をしっかり行い、独りよがりの考察にならないように相手に伝える必要があることを学ぶことができた。